

1 対象機関の概要

所在地：宮崎県宮崎郡清武町大字木原5200

設立年：昭和49年6月

学部・学科・学生数：医学部医学科（6年制，1学年100人），看護学科（平成13年4月設置，4年制，1学年60人，3年次より編入10人）

大学院：博士課程4専攻

附属病院：17診療科

教員数：医学科33講座135人，看護学科3講座8人，基礎教育科目等9学科目11人，附属病院97人

宮崎医科大学は医師の地域的偏在の是正と地域医療水準の向上等を目的とし，国が進めてきた無医大県解消計画に基づき，医学に関する教育研究の向上発展に資するとともに宮崎県における地域医療の中核的機関としての役割を果たすため，昭和49年6月に設置された。昭和52年4月に附属病院が設置，開設され，昭和55年に大学院医学研究科（博士課程）が設置された。平成13年4月に看護学科の設置を見た。

本学の教育理念・目標は学則第1条目的及び使命として「進歩した医学及び看護学を修得せしめ，人命尊重を第一義とし，医の倫理に徹した人格高潔な医師，医学研究者，看護職者及び看護学研究者を育成することを目的とし，医学及び看護学の水準向上と社会福祉に貢献することを使命とする」と定められている。全国から学生が入学しており，これまで2084名が卒業しそのうち2071名が医師国家試験に合格している。全卒業生の合格率は99.4%となっている。卒業生の約3割が宮崎地域で活躍している。

附属病院は高度，中核的医療機関として，先端の医学研究，医療技術の研究・開発を行うとともに高度の医療を提供し，地域の医師や医師会とも連携して，医学・医療をとおして社会に貢献している。

本学では国際的評価に耐えうる独創的な研究と地域性を加味した特色ある研究が展開されており，高引用度の論文も多い。またアジアの3大学・医学院と協定を締結し国際交流を図っている。

看護学科はその基本理念として，「人間理解と生命の尊厳を基盤として，自己の成長と人間への配慮・支援を可能とする主体的で情豊かな人間性と看護実践に関する総合的な能力を養うとともに，発展する高度医療とその専門化の中で生じる多様な保健医療福祉ニーズに対して，広い視野をもって実践できる看護職を育成することによって，人々の健康と福祉に貢献する。さらに，教育・実践・研究の連携を推進し，看護学の発展と看護の質の向上に寄与する。」を掲げている。

2 教養教育に関する考え方

本学の教育目標は「進歩した医学及び看護学を修得せしめ，人命尊重を第一義とし，医の倫理に徹した人格高潔な医師，医学研究者，看護職者及び看護学研究者を育成する」ことである。これは当然に，医学部医学科の6年間，また看護学科の4年間の講義・実習・演習や体験実習のすべてを通して専門教育だけでなく教養教育の理念である「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い，豊かな人間性を涵養する」教育を目指しており，実践している。

教養教育と専門教育との関連について述べれば次のようになる。本学は医学部だけの単科大学であり，組織としてはいわゆる教養教育を担当する基礎教育学科目等が置かれている。本学では学科目担当教員が中心となり，医学科講座担当の教員や附属施設の教員も参加して教養教育科目即ち基礎教育科目の授業が展開されている。従って基礎教育科目の授業科目には，医学や看護学へのモチベーションを高め，初歩から専門教育への導入までを意図した科目も含まれている。

教養教育に関する考え方については，おおよそ次のような合意または認識が形成されている。即ち，常に批判的精神を忘れず，付和雷同することなく自分の考えで物事を判断できる人間を育成するのが大学の基本的な存在意義であり，教養教育はその中心的な責務をおっている。そのことから教養教育には大きく分けて2つのことが求められている。第1は，専門にかかわらず，社会とのかかわりの中で生きていく上で必要となる基礎的知識や能力とか資質を獲得し，また高めていくこと，即ち一般的な教養を身につけることである。第2は，医学や看護学を学ぶ上で必要な基礎学力としての知識や方法論を身につけること，即ち専門教育とうまくつながるような専門の基礎としての教養である。しかしこの2つは分かちがたく結びついている場合もあり，自然系の科目やいくつかの授業科目においてはこれらを統一的にとらえ教育を展開している。

さらに医学部においては次のような考え方もある。医学は人の生命や病気を対象とする自然科学の一分野であるが，医療は単に病気を対象とするのではなく病気に罹っている人間（患者）を対象とする。看護についても同様である。従って将来医師または看護職者たるべき学生にとっては，自然科学としての医学の知識の修得だけでは不十分であり，人や文化を理解する力を培ういわば人間学といった視点を含む広い意味での教養教育が不可欠である。

3 教養教育の目的及び目標

本学は医師及び医学研究者、看護職者と看護学研究者の養成を目的とする医科大学である。この目的を達成するためには、専門的知識や技能を学ぶだけでなく、医師、医学研究者や看護職者に相応しい資質を身につけねばならない。豊かな人間性をもった職業人を育成することが大学の使命であり、これに沿う教育が教養教育と言われるものである。

<目的>

教養教育の目的を本学の設置目的に照らして次のように述べることができる。1. 科学的で論理的な思考ができる。2. 社会の中で自己を位置づける力をつける。3. 行動の基準とそれを支える価値観・倫理観を確立する。4. 批判的にものを見る眼を養う。5. 国民の健康を考えその実現に向かう行動力を培う。6. 円滑な対人関係の確立、他者の立場への理解と思いやりなど個人としてまた医師、看護職者として社会の中で生きていくために必要な資質を育む。7. 問題解決能力を身につける。8. 国際的な視野をもち、歴史的、多元的な視点に立って物事を考え解決する能力を養う。9. 日本語以外の外国語でコミュニケーションが図れる、等である。これらの目的を全体としてまた総合的に達成するために、医学科では基礎教育科目32科目が、また看護学科では基礎科目20科目（平成13年度開講分）が授業科目として設定されている。学内で担当する教員は基礎教育学科科目教員11人、附属施設教員3人、学長・副学長3人と「生命科学入門」を分担する基礎・臨床系担当教員55人（13年度前期）である。少人数であり、他大学等からの非常勤講師にも担当を依頼している。

各授業科目における目的、目標にかかわる部分は担当教員に委されている。特徴的な観点のうち目的に関して次に列挙する。

生物学：生命科学を理解する上での基礎科学であり、医学を学ぶための生命科学の基礎的知識と概念を身につけることを目的とする。また生物学教育は人間だけを対象とした学問ではなく広く自然界全体が人間に関与していることを認識させる。ヒトと他の生物との相違点や関連性を提示し、自然界における人間の位置づけ及び特徴について認識させる。

物理学：自然科学の中で最も基礎的な学問体系をなしており、全ての自然現象は生命現象も含めて物理の法則に支配されていると見ることもできる。この観点から物理に用いられている論理、法則の発見や演繹の過程また自然の美しさと驚異を学び取ることは、科学や関連分野を志す者にとって有用であるとともに人間が謙虚であることの大切さを理解させる。

化学：高校での学習内容との連続性と系統性に留意し、医学や看護学分野で必要となる化学の基礎的な部分が理解できるようにする。現代化学においては分子系は電子の挙動に基づいて理解されることを学ぶ。有機化学では生体有機分子の役割や機能を、生体無機化学では無機物質や金属イオンの生体内での役割が理解できるようにする。

数学：自然科学の様々な分野や専門職業人にとって必要とされる数学的な考え方とともに、代数的、解析的及び統計的扱いの基本となることを学ぶ。

社会学：人間の社会行動に潜む一定の規則性即ち社会関係や社会制度等とその因果関係を扱うが、特に医療の問題を中心的にとり上げ基本的な考え方を解説する。

心理学：人間の知・情・意や全精神生活における心の営み並びに行動を科学的に研究する学問であることを理解させ、関連する概念の習得にとどまらず人間性を豊かに発展させ、臨床医・看護職者としてそれらの概念を活用できるようにすることを目的とする。

哲学：人間生存や生の営みのもつ意味やよく生きるとはどういうことか等を知ろうとする態度を身につける。

法律学：主要な条文や社会的事件を通して、生きた社会から生きた法を学びとれるようにする。また、法という視点から現代社会を見る眼を養う。

人間関係論：人間関係形成能力の向上を目指して、自己理解を深め、人間としてのあり方・生き方について理解させるとともに、グループダイナミクス等、人間関係形成のプロセスや技法について学ぶ。

文化人類学：価値の多様性とそれが形成される背景の理解を深めるために、外国を含め多様な環境で生活する人間集団の、生活様式や社会組織・制度・習慣などについて学ぶ。

医学概論：医師及び看護婦（士）という職業は、個々の患者の生命を預かる主治医でありまた健康回復の支援者であり、医療施設の組織の一員であって、かつ社会で人々の生命と健康にかかわる専門職である。この観点から医師、看護職者のあり方、医療・医術・医道・看護の諸問題、医療と社会および医学の歴史を総合的にとり上げ理解させる。

生命科学入門：医学を学ぶ前に人体の基本的な構造、機能および病態について英語教科書を用いながら少人数チュートリアル教育を行う。

実験動物学：近代医学は動物実験とともに発展してきたとも言える。近年、動物実験には多くの進歩とともに危惧をいだく意見や動きがある。これらをふまえて動物実験の意義を理解させる。

外国語：語学は授業を通して幅広い教養や素養を身につけ、豊かな人間形成をはたすとともに論理的な思考方法の涵養につとめる。同時に情報伝達や意思疎通の

手段としての運用能力を高めることを目的とする。英語は中学校以来の蓄積の上に、英会話を含めた実用的また実践的な力をつけることに意を用いる。ドイツ語は歴史的には医学との関係もあり初級・中級レベルの基礎学力をつける。フランス後、中国語は初級外国語の基礎学力をつける。あわせて異文化についての理解が得られるようにする。医学ラテン語は医学用語が理解できることを主な目的とし基礎的な事柄を理解する。情報学：国レベルとしてまた国民全般に必要なIT教育を大学教育に採り入れる。自らがITを活用できるとともに、国民に対して一般教養の提供者、教育者あるいはオピニオンリーダーとなりえることを目的とする。

各科目分野における教養教育の目標は次のようになる。

<目標>

自然科学系科目：医学や看護学を学ぶ上で必要となる基礎的な知識、概念や自然科学各領域における法則や規則性を理解する。自然科学各分野の理論の展開法、論証や検証の方法、実験と理論がどう結びついて発展したか、学問の厳密性はどうか確保されているか、未知の領域の開拓・研究はどうか行われてきたのかを学び、将来の専門課程への興味や関心を喚起し道案内の役割をはたす。科学の歴史、技術論、科学が社会に与えた影響や思想的な役割、また科学者の社会的責任など科学一般にも関心を持つようにする。

人文・社会科学系科目：人間生存やよく生きるこの意味を深く追求すること。人が社会とかわる中で、法はどのような役割をもっているのか、人はどのような社会行動をするのか、医療問題とは何か、医療制度とその問題点とは何か等を具体的にとり上げ理解させる。心理学分野においては、人間の心の営みや人間の行動の諸要素について基礎的知識を習得するとともに人間の発達過程と発達段階における諸問題を理解する。人間関係論や文化人類学の授業科目においては、いわば人間学ともいえる諸テーマを採りあげる。

医学概論：心と体、医師とはどのような職業か、生命倫理、医療倫理、週末看護、医療事故、医療保険制度、医療と社会、医学史、病気の歴史、現代の諸問題等、医学・看護学に関する全般的な課題について理解を深める。

外国語科目：多面的な教材を用意し語学を通して、様々な人間の考え方や生き方、また世界の歴史や文化などを理解する視野を備える。英語ではそれを使って情報伝達や意思疎通が出来るようにする。文章が理解できることや医学英語の理解と英語で文章が書けるようにする。また外国人の英語が聞けて、話ができるようになること、また発表の方法や相手の状況、態度や

関心に応じた討論の仕方も学ぶ。ドイツ語では発音、基本文法や基本的な文構成原理を理解し、初級から医学ドイツ語をふくむ中級レベルの語学力をめざす。フランス語、中国語は初級外国語としての基礎学力をつける。

情報学：情報機器の基本操作、情報の取り扱い方、利用、保存、整理や管理ができるようにする。情報倫理についても学ぶ。個人の技術の向上だけでなく、周りの人にも語れる力をつける。

4 教養教育に関する取組

(1) 実施体制

医学科の教育課程は「基礎教育科目」、「基礎医学科目」及び「臨床医学科目」の3区分をもって編成され、教養教育は「基礎教育科目」の中で実施されている。看護学科については「基礎科目」として教養教育を行う。全学のカリキュラムは教務・厚生委員会及びその中のカリキュラム検討部会で検討、作成され教授会で承認されて実施される。

医学科・基礎教育に関する検討部会では、本学の教育目標をふまえて、教養教育の理念や考え方を整理し確認した上で、これまでの基礎教育科目カリキュラムの再検討と全学的な教育改革との整合性および看護学科の新設に対応するものとして、新カリキュラムの策定を検討してきた。また基礎教育科目と基礎医学科目との低学年における相互乗り入れと効果的な接続のあり方がここ数年にわたって検討され、教務・厚生委員会と教授会の議をへて平成13年度より新カリキュラムに移行することとなった。カリキュラムの検討の際には、学生の代表にも意見を求め編成の参考とした。

教養教育は基礎教育科目教員を中心にして附属動物実験施設、実験実習機器センターや医療情報部の教員並びに学長・副学長が参加し担当している。平成12年度開講の「医学英語」や平成13年度開講の「生命科学入門」は基礎医学系教員を中心として全学の教員が分担当している。また、教養教育担当の教員が少ないことから開設授業科目のいくつかは学外の非常勤講師に担当を依頼している。本学では授業科目の内容のうちある一定部分をそれに関係の深い専門の方を招いて講義を依頼できるようにしている。

教養教育に相当する基礎教育科目の履修は平成13年度より2年で終わることにした。本学は学年制を採用し、各学年で修得することが義務づけられている授業科目・単位数をクリアしなければ、原則として次の学年に進級できないという進級基準を設けている。

カリキュラムの決定に関して述べる。平成13年度からの全学的なカリキュラムの改訂について、1年以上前から検討が開始された。基礎教育科目に関するカリキュラム検討部会では、授業科目の必修・選択の区分、授業内容及び科目名の変更、単位数の見直し、新構想にもとづく授業科目の開設、選択科目の開講、学年配当の適否や少人数教育科目の検討などが行われた。医学科と看護学科学学生にたいする授業の設定も検討した。また基礎教育科目と基礎医学科目との相互乗り入れと効果的な接続のあり方が検討されてきた。その結果これまで1年より開講されていた解剖学（基礎医学科目）

は2年に移行することとなった。医学科と看護学科の授業は一部合同授業とすることとした。選択科目は両学科学生とも受講可能となるようにした。成案は教務・厚生委員会と教授会の議をへて平成13年度より新カリキュラムへ移行することとなった。カリキュラムの検討の際には学生の代表にも意見を求め、編成の参考とした。

看護学科のカリキュラムについては、新設であるため設置準備委員会で決められている。

次に授業評価にふれる。講義科目の授業評価はこれまで2回行われている。1回目は本学同窓会が中心となって平成6年度の講義及び実習について行われ、平成8年に結果が同窓会誌に公表された。評価は在学生と卒業生によるアンケート調査で、1.良かった2.普通3.悪かった、の3段階で行っている。学生からの授業科目にたいする意見も併せて調査公表された。アンケート結果については各教員の参考とされたが、大学としては検討がなされず授業等に十分に反映されていない。2回目として大学学生会による授業評価が行われ、それに基づいてカリキュラム改革に関する意見書が平成12年11月にカリキュラム検討委員会に出された。基礎教育科目の授業評価は、1.医学を学ぶ上で役立つ科目2.医学を学ぶ上で役立たなかった科目3.役立つかどうかによらず必要という科目、等の調査の結果が公表され、カリキュラム編成や講義時間についての要望が出された。カリキュラム検討部会ではこれらを含めて学生側の意見を聞く場を設けてカリキュラム編成の参考とした。今後は大学として学生の協力をえて授業評価を実施することが予定されている。

本学ではこれまで2回のFDワークショップを開催した。第1回は平成11年6月に臨床医学教育改善のためのFDはいかにあるべきか、特に学習成績評価をめぐる、行われた。報告書が出されており、内容的に良かったという意見が多かった。第2回は平成12年12月に開催された。目的は医学教育に責任をもつ教授をはじめ教員が医学教育者としての専門性を高め、カリキュラム作成の基本並びに効果的な教育技法、学習方略を習得することであった。特にチュートリアル教育についてと本学のカリキュラムプランについての講演が行われ、分科会、全体会議の中で教養教育のあり方が討議された。ここでの討論はカリキュラムに反映されている。ワークショップには教職員と学生を合わせて140名の参加があり、内容については肯定的な意見が多く出されている。

毎年4月には主に新任教員を対象に研修会を実施して、本学及び国立大学の現状と当面する課題、大学運営について及び大学教育の在り方に関する内容をとりあげている。

(2) 教育課程の編成及び履修状況

<教育課程の編成>

本学の教育理念・目標に基づき、教養並びに専門課程のカリキュラムが編成されている。平成13年度からの新カリキュラムへの移行と策定の中で、教養教育即ち本学における基礎教育の理念・考え方を次のように確認している。即ち「医学・医療に対する社会的要請に応え、幅広い視野を持ち人間性豊かで、世界に通用する優れた見識と能力を持つ医療人並びに研究者の養成を基本理念とし、医学・看護学を学ぶうえで必要な基礎知識、技術を修得し、且つ社会変化に対応できる幅広い教養を持つ人材育成のための基礎教育・教養教育を目指す。」さらに、平成3年の大学設置基準の大綱化に伴い、科目区分に必ずしもとらわれないカリキュラムの編成を目指している。

一方、医学や医療はある意味であらゆる科学が関係した総合的な学問分野であると言える。

これらの観点から、教養教育担当教員の人的条件を考慮し、次のような方針でカリキュラムを編成している。

1. 可能な限り自然科学系、人文・社会科学系、外国語、情報・コミュニケーション論、文学等をバランスよく履修できるようにする。
2. 必修科目と選択科目を備え、選択科目の枠を広げる。
3. 本学での自然科学系科目（生物、物理、化学、数学系科目）は、医学科においてはミニマムであり、必修とする。
4. 人文・社会科学系科目においては、医学科・看護学科共通の授業科目を編成し、新規の授業科目は選択科目とする。
5. 外国語科目は少人数クラスの授業を行う。英語は25 - 35人クラスで、ドイツ語は50人クラスを編成する。
6. 2年ではドイツ語、フランス語、中国語を選択履修できるようにする。英語にも選択できる科目をつくる。
7. 高校で生物学または物理学を十分に履修していない学生（大学入試センター試験で生物学または物理学を受験しなかった学生）に対し、初級レベルから始める入門講義としての生物学及び物理学の概論科目を1年前期に開講する。
8. 医学への内的動機付けを高めるための生命科学に関するミニチュートリアル授業を開講する。基礎医学の教員が中心となる。
9. 体育医学は平成13年度入学生からは廃止する。課外スポーツの位置づけと他の教科との兼ね合いによる。

10. 医学科と看護学科の学生の合同授業を展開する。
11. 医学科学生に対して、卒業に必要な単位数のうち基礎教育科目にかかわる単位数を減らす。（平成13年度からは従来の82単位を61単位に縮小した。）
12. 医学科学生に対して、1, 2年次に学内外で看護と介護の体験実習を取り入れる。

カリキュラムの特色としては次のものがあげられる。
(1) 医学科、看護学科の学生にとって専門の基礎としての知識または技能として修得しておくべき教科は自然科学系や文系を問わず必修として受講することを義務づけている。

(2) 高校で理科の教科のうち生物学または物理学を履修していない学生に対しては、高校の教科内容の補完と大学課程への入門としての授業科目を設置している。高校で履修してきた学生も受講でき、希望者も増えている。

(3) 外国語科目は少人数クラスの授業を展開している。

(4) 生命科学入門や情報学などでミニチュートリアル教育を導入している。

(5) 生命科学入門等では基礎医学の教員が中心となり、臨床医学および基礎教育科目の教員も参加し、全学的な取り組みをしている。

(6) 1, 2年の間で教養教育と基礎医学教育が相互乗り入れの形で授業を展開しており、学生の知的刺激の要望に応えている。

(7) 医学科と看護学科との合同授業を行っている。

看護学科については、次のような方針のもとに編成がなされている。

看護学科の教育理念に則り、教育課程において、人間・健康・環境を基本概念として設定し、これに該当する科目として教養科目（人間科学、環境科学）を位置づけた。数理的内容は健康科学の範疇とした。教養科目は看護を学ぶ上で不可欠な科目であり、それぞれ看護専門科目の基礎と位置づけた科目は1年次より、人間性の形成を目指す科目は4年次に科目設定をする。また語学に関しては環境科学の中でコミュニケーション学として位置づけ、従来の英語・英会話のみでなく、中国語・フランス語・ドイツ語の選択、英書購読やコミュニケーション文化論を設定し、対人関係職における言語の重要性や国際化も重視する。

その上で、看護はその対象である人間理解、健康と病気、人間に影響を与える環境、看護の4つの基本概念をどのように定義するかによって必要な科目が構成される。基本概念は学科の教育理念に則ってそれぞれ定義した。これに従って人間理解に必要な科目を人間科学とした。また環境は生物の成長・発達に影響を与

える外的条件であり，その中心は社会的・文化的環境である。それを環境科学として位置づけ，それぞれに該当科目を設定した。

看護学科におけるカリキュラムの特色として次のことがあげられる。

- (1) 高校時代の履修には個人により差があることから教養科目は選択制とする。
- (2) 看護学の基礎となる科目に関しては1年次から履修とし，生命の尊厳や価値の多様性の思考に関する科目ならびに人間性の涵養などに関わる科目は高学年で履修する。
- (3) 外国語に関しては単なる語学ではなく，コミュニケーション学として位置づける。

本学では毎年入学時に，医学科および看護学科ともに新入生合宿研修を行っている。本学の教育方針や大学での学び方，履修に関することや大学生生活上での諸規則等についてその徹底を図っている。また合宿研修では学内教員が医学や看護学に関する講演を行い，学生の医学や看護学に対する関心や疑問に応え，同時に仲間づくりの場としての意味をもたせてこれを行っている。

< 履修状況 >

医学科：平成12年度までは全て必修または選択必修であったので授業科目は全員履修している。平成13年度からは医学科でも選択科目が導入された。選択科目は1年後期に開講される予定である。

看護学科：教養科目は必修が6科目で他は選択となっている。看護学科は平成13年度4月に開設され，5月1日入学式を終えたところである。学生の教科選択は2週間の授業体験の後届出締め切りとした。学生の選択した教科は多岐にわたり，選択指定単位数以上の受講を希望している学生も多い。

(3) 教育方法

< 全体的な基本方針 >

自然科学系科目：各教科の基本的な性格、特徴、守備範囲を示し、その考え方や論理の展開のしかたを理解させる。基本的な概念から始めて、徐々に高度な内容、構造、機能、規則や法則を理解できるようにする。医学、医療や看護に関係する内容もすすんで採り入れている。各教科は狭い分野や応用に限定せず、自然の理解をめざす一般的かつ普遍的な性格を持ちそれ自身が知的興奮を呼び起すものであることを理解させる。生命科学入門は少人数チュートリアル教育を行う。

人文・社会科学系科目：人間が社会との関係においても諸課題を、個人の問題として、社会的な問題として、また個人と社会の相互関係としてどう捉え理解していけばよいかを歴史的な変遷や現在の学問的到達点を提示しながら、学生との討論を交えて追求する。

語学：外国語による情報の理解、伝達能力の向上とともに教科・教材を通じて多様な文化、歴史や思想にふれ、意見発表や相互討論等を通じて幅広い教養の獲得および人間形成をめざす。医学、医療や看護に出てくる用語とともに関係した文献や論文が理解できるようにする。

情報学：コンピューター機器を用いて実践的に情報の活用、交換等ができるようにする。また技術としての側面だけでなく、IT社会の中での情報倫理やこれからの社会のあり方も考えていく。

< 授業形態 >

講義形式が中心で、授業の中でビデオやOHP等の視聴覚機器を利用しているところが多い。生物学、物理学および化学の授業科目においては実験・実習時間が確保されている。情報学はコンピューター機器を用いた実践的な授業を行っている。

< 成績評価 >

定期試験の他に、レポート、宿題、小テスト及び授業の中での発表などを総合的に評価しているものが多い。定期試験の比重が大きい。

< 各教科の教育方法、授業や成績評価 >

担当の教員に委されており、以下にのべる。

生物学：(方針) 論理的かつ体系的に、歴史的背景も含めて生命現象が理解できるようにする。個々の生命現象と医学のかかわりが解るようにする。(授業) 講義。スライドやビデオも使用。生物学実験を12時間実施。(評価) 定期試験。論述式で論理の展開、専門用語の理解度や文章の客観性をみる。

物理学：(方針) 基本的な概念や法則を学ぶことにより物理学の考え方や方法、またそれが思想や科学技術への応用を通して社会へ与えた文化的・文明的な影響も

理解させる。(授業) 講義。OHPやビデオを用いる。物理学実験12時間を実施。(評価) 定期試験、課題レポート及び実験レポートを評価。

化学：(方針) 電子、原子、分子に関する基礎から始めて分子の性質や機能が理解できるようにする。分子やイオンの役割、機能や生体内での働きが理解できるようにする。(授業) 講義。分子模型やビデオを利用。演習問題や公開実験を行う。宿題を課す。化学実験を2年生に12時間実施。(評価) 定期試験。レポート、態度や出席状況を総合的に評価。

生命科学入門：(方針) 医学入門としての人体の構造・機能や病態を学ぶ。英語で用語を含めて内容が理解できるようにする。(授業) 10人程度のクラスで少人数チュートリアル教育。(評価) チュートリアル毎の評価と定期試験

社会学：(方針) 述語や数値の暗記はできるだけ避け、身近な、できれば自己の事例に基づいて社会現象を解釈できるようにする。(授業) 講義。テーマによっては少人数グループによる討論。(評価) 定期試験。ノート、資料持ち込みで内容の理解度を問う。

心理学：(方針) 知識伝授型でない学生参加型の授業を目指しながら、最低限の基本的概念を習得でき使えることをめざす。(授業) 講義とグループ別のテーマ学習、プレゼンテーション。(評価) 定期試験、出席、課題学習を総合的に評価。

医学概論：(方針) 大学は卒業させた学生に対して社会的な責任があり、国民の付託に応えるような医療人を養成する義務を負っている。この観点から医学、医療及び看護の諸課題を広く採りあげる。(授業) 学内外の多方面の講師によるオムニバス形式の講義。(評価) 各項目ごとのレポートと学年末定期試験。

英語：(方針) 異文化の理解や討論、対話のしかたを学ぶ。読解力とともに聞いて話すことができるように少人数クラスの授業をする。(授業) 25 - 35人クラス授業。研究発表、グループ討論、質疑応答や面接などを組み合わせる。(評価) 定期試験。レポート、面接や意見発表、研究討論、質疑応答などを総合評価。

ドイツ語：(方針) 予習を前提にし、音読を基本に行う。綴り、正しい発音を覚え、単語、文章を音読する。また暗記をすすめる。(授業) 50人クラス(1年) 講義。ビデオ、文学作品やスライドを教材に用いる時は全体で討論をする。(評価) 定期試験。平常の理解度、態度。暗記試験。

情報学：(方針) 情報リテラシーに関する内容から始めて、パソコンの操作、情報の取り扱いや作成ができるようにする。情報倫理を学ぶ。(授業) 講義とチュートリアルの併用。グループ発表会。(評価) 出席、レポート、グループ発表会の評価に基づいて行う。

5 変遷及び今後の方向

平成3年の大学設置基準の大綱化をうけて本学の教養教育は一つの変革を行った。一般教育から基礎教育という言い方になり、教養教育の性格も専門のための基礎という色彩を強く打ち出すようになった。授業科目名に、医学または医療という名を付け、あるいは医学に関連性のある科目名が採用されてきた。

また、基礎教育と専門教育の結びつきを意識した教育が6年一貫教育という方針で行われてきた。その結果基礎教育は1年から3年にわたって長期に行われ、また、基礎医学のうち解剖学は1年から、生化学や生理学は2年から開始されるカリキュラム編成となった。医学生に早期に専門の学問を学ばせ、医学への内的動機付けを高める上では役割を果たしてきたと言える。また、教養教育も一過性のものでなく、常に大学教育全体の中に組み込まれていることの重要性も認められていた。

この数年、大学の自己点検、評価をする中で本学のカリキュラムの見直し、基礎教育、基礎医学と臨床医学の全てにわたって行われてきた。カリキュラム見直しの直接的な背景としては臨床医学における臨床実習やオスキーを含む新しい教育方法の導入と検討にあったが、教養教育についても改めて、その理念を再検討するところから新カリキュラムについて改革の方向を打ち出してきた。また平成13年度から看護学科が新たに設置されることも教養教育カリキュラムの見直しの理由の1つであった。カリキュラム検討委員会で検討を重ね、教務厚生委員会、教授会の議をへて、平成13年度から新カリキュラムへ移行することになった。

新たな教養教育即ち本学の基礎教育カリキュラムの基本方針と改訂の中身については「4(2)教育課程の編成及び履修状況」のところでも既に述べたとおりである。

<今後の課題・方向>

しかしながら教養教育について種々検討を積み重ねてきたが、まだ結論を得ていない今後の課題として次のようなことがある。

- (1) 他大学既卒者で入学してきた学生に、出身大学で得た教養課程の単位を本学の基礎教育の単位として読み替え、認めるかどうか。どの範囲で認めるか。判定の基準はどうするか。誰が判定するか。
- (2) 放送大学の受講者がそこで得た単位を本学の単位として認めるかどうか。
- (3) 宮崎大学と本学との間には単位互換に関する協定が、平成7年度に締結されたが、まだ実績はない。協

定を実行可能とする条件をどう整備していくか。

- (4) 選択科目の一層の拡大は可能か。学生の要求はどのようなものか。
- (5) 講義型授業からチュートリアル教育への転換はどこまで行うべきか。また必要なか。
- (6) 学生によるカリキュラム編成への関与はどうあるべきか。
- (7) 大学として学生の協力を得て行う授業評価をどう実施していくか。またその結果を授業、カリキュラム改善にどう役立てていくのか。
- (8) ネットワークを利用して他大学の講義、授業との連携、参画をどう進めてしていくか。
- (9) 電子図書館、電子黒板の教室への導入をどう計画するか。

今後は現在の教養教育の達成度や自己点検・評価を通じて、また継続課題の検討を進めながら、さらなる望ましい教養教育の在り方を目指して必要な改革や改善を図っていく。また国際的な意識や感覚をたかめていくために、国際交流締結大学との交流をどのように有機的に採り入れていくかはこれからの教養教育を考える上で大事な課題の一つであると考えている。

(2)

授業科目区分名	授業科目名
医学科 基礎教育科目	英会話 医学情報学
看護学科 基礎教育	芸術学

4-3-3 一般教養に関する教育の授業科目におけるシラバスの実施状況

(1)

1

・「2」を選択した場合

授業科目区分名

・「3」を選択した場合

学部名	授業科目区分名
-----	---------

・「4」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

--

4-2-5 一般教養に関する教育の授業科目の履修状況

(1) 平成12年度

授業科目区分名	最小値 (人)	平均値 (人)	最大値 (人)
基礎教育科目	27	91.1	112

(2) 平成12年度

<1> 分母を履修登録した学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 (%)	平均値 (%)	最大値 (%)
(全科目必修)			

<2> 分母を成績判定を行った学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 (%)	平均値 (%)	最大値 (%)
基礎教育科目	85.7	97.6	100

(3) 平成12年度

平均値 (単位)	最大値 (単位)
8.2	8.2

4-3-2 一般教養に関する教育の授業科目における履修登録者数の上限設定

人数区分	授業科目区分名	
		授業科目名
1. 20名以下	基礎教育科目	英語
2. 21名以上 ～50名以下		ドイツ語 フランス語 中国語
3. 51名以上 ～100名以下		
4. 100名超		

(2)

1, 3, 6

(3)

3

・「7」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

--

(4)

1

・「4」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

--